



Title	会話における「なんか」の機能に関する一考察
Author(s)	鈴木, 佳奈
Citation	大阪大学言語文化学. 2000, 9, p. 63-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78024
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

会話における「なんか」の機能に関する一考察*

鈴木 佳奈**

The purpose of this paper is to investigate how the Japanese word *nanka* functions in conversation. *Nanka* is a word which both speaker and listener employ in natural conversation almost without being conscious of its existence, and very few studies have described and discussed the way it is actually used. This study, therefore, collects spontaneous conversation and analyzes the word in relation to the stance the speaker takes towards his/her own utterances and the knowledge the participants share, as well as the text which precedes and follows the utterance in which *nanka* is embedded. The approach employed is an interactional sociolinguistic framework, with key concepts such as “production format” (Goffman 1981), “information state” (Schiffrin 1987), and “turn-taking system” (Sacks et al. 1974) applied. The data consists of transcripts of 15-minute tape-recorded conversation between 18 pairs of Japanese university students who are in the same grade but do not know each other.

910 instances of *nanka* were observed in the data. Analysis of the instances shows that *nanka* performs more various functions than previously identified. These functions can be divided into three groups; semantic function, pragmatic function and communicative function. The semantic function directly affects the propositional content of the utterance. *Nanka* as a pronoun or an interrogative refers to uncertain and indefinite things or events; this is the core meaning of the word. *Nanka*, while performing this

* Functions of the Japanese Word *Nanka* in Conversation. (SUZUKI Kana)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

function, also works as a particle. The pragmatic function makes the speaker evade responsibilities for his/her own utterances and conveys a metamessage to the listener by indicating a shift in the production format. It is also used to avoid stating a speaker's negative opinions, especially in cases where the listener seems to share enough knowledge with the speaker to infer the speaker's intention. The communicative function encourages smooth communication between the participants when they try to take or maintain their turn in conversation. The pragmatic and the communicative functions may be derived from the core meaning of the word as an indicator of uncertainty or indefiniteness. As these three functions are closely associated with each other, two or more can be performed simultaneously. That is, *nanka* is a multi-functional word.

1. 本論文の目的

会話には「ま」「なに?」「ほら」「なんか」「もう」などの「会話特有の表現」(ザトラウスキー1993:187)が頻繁に出現する。「会話特有の表現」は、話し手側も発話したことをほとんど意識しておらず、聞き手側もまた、無意識のうちにそれらを聞き流している。しかし、話し手も聞き手もほとんど意識していないとはいえ、これらの語句も会話の中で何らかの働きをしていると考えられる。本論文では、会話特有の表現の中でも特に頻繁に現れる「なんか」を取り上げ、会話におけるその機能を検証してみたい。

「なんか」の機能について触れている先行研究は田窪・金水(1997)の他にはほとんどない。しかし田窪・金水(1997)でも、「なんか」が言い淀みの語であり、感動詞として使われる場合は、もともと持っていた指示機能を失って、「だいたいこんな感じ」といった「心的状態」に対応する形式になっていることを述べるにとどまっており、具体的な検証も詳しい説明も行われていない。そのため、実際の「なんか」の多様な機能を単純化してしまっている危険性がある。

そこで本論文では、「なんか」の機能を、「なんか」が含まれる発話だけでなく、

その前後のテキスト、さらには参加者の発話へのかかわり方や共有知識などのコンテキストを考慮に入れて明らかにすることを目的とする。特に自然な会話をデータとすることで、「なんか」の実際の機能が具体的に解明できるものとする。

2. 本研究の方法論およびデータ

本論文では、実際の会話の分析に相互行為の社会言語学(interactional sociolinguistics)的な手法を用いる。相互行為の社会言語学とは、言語が参加者のアイデンティティや関係づけなどのコンテキストをどのように反映し、それが相互行為にどのように影響を与えているかを明らかにするための枠組みである。本研究では特に、Goffman (1981)によって提唱された、*animator*、*author*、*principal* から成る *production format* および *figure* の諸概念¹⁾、また、Schiffrin (1987)の *information state* にあたる「知識」²⁾などを応用して、会話における「なんか」の言語的機能を分析、考察する。さらに、会話分析(*conversation analysis*)の概念である「話者交替(*turn-taking system*)」(Sacks et al. 1974)をも分析に取り入れる。

データとして、初対面の大学生同士の15分間の会話18組(男性同士のペア、女性同士のペア各9組ずつ)を、録音し文字化³⁾して使用した。

¹⁾ Goffman (1981)は、それまで話し手(*speaker*)と呼ばれていた役割を、音声を発する *animator*、表現する語彙を選択して文の形に組み立てる *author*、伝達される信条や感情を有する *principal* に分解し、それらを *production format* と呼んだ。さらにトーク中の世界の登場人物としての話し手 *figure* も導入した。同一人物がこれらの役割を担うこともあるが、必ずしもそうではなく、相互行為の中でその役割は変化する、と Goffman は述べている。本論文では *principal* を、Goffman の考え方をふまえつつ、「話し手の発話内容に対する距離あるいは立場を表明する」役割として解釈する。

²⁾ 本論文での「知識」は、Schiffrin (1987: 28)に従って、単に話し手と聞き手がそれぞれ持っているあるいは共有している知識だけではなく、自分と相手がどの程度知識を共有しているのか、あるいはしていないのかというメタ知識をも含む。

³⁾ 文字化の表記法は次の通りである。

行頭のアルフベット：発話者(仮名)の頭文字

? : 上昇イントネーション 。 : 下降イントネーション 、 : ごく短い沈黙

(2.5) : 沈黙(かっこ内は沈黙の秒数) - : のびた音 [: 重複

| | : 非言語行動 → : 議論の中心となっている発話・行動に注意を促す

3. 分析および考察

実際のデータの分析に入る前に、『広辞苑』での「なんか」の定義を確認してみる。最新の『広辞苑』（1998）では次のように定義されている。

1. (ナニカの音便)何事か。何ものか。
2. [助詞](代名詞ナニに助詞カが付いたものの転)
 - a. 一つの例として示す。
 - b. 望ましくないもの、価値の低いものとしてあげる。

18組のデータ中にみられた「なんか」の総数は910例(男性ペア436例、女性ペア474例)であった。しかし上に挙げた『広辞苑』の定義で説明が可能なものはわずか60例(6.6%)にすぎなかった。そして残る850例(93.4%)の「なんか」も、詳しく観察するうちに、決して無意味な語ではなく、他の機能を担っていることがわかってきた。

本論文では、『広辞苑』の定義を含めて、実際のデータに現れた「なんか」の機能を意味論的機能、語用論的機能および談話調整機能⁴⁾に分類した。3.1ではまず意味論的機能を有する「なんか」を概観する。次に3.2で語用論的機能について詳しく論じ、最後に3.3で談話調整機能について分析を行う。

3.1 「なんか」の意味論的機能

意味論的機能を有する「なんか」は、疑問詞・代名詞・助詞として、発話の命題内容を構成する一要素となる。

3.1.1 疑問詞・代名詞としての「なんか」

『広辞苑』の記述からわかるように、「なんか」は「何か」の撥音便形である。そのため「なんか」には、もとの語「何か」が持つ未知の物事・不特定の物事・はっきりしていない物事を指示するという意味が受け継がれている。

⁴⁾ 言語の意味論的機能、語用論的機能、および談話調整機能は密接に関連しているが、本研究では次のように定義する。

意味論的機能：発話の命題内容に直接かかわる、語の言語内での働き。

語用論的機能：発話者の意図、発話者と発話内容の関わり方など、言語外の要素を反映し、メタメッセージを伝える語の働き。

談話調整機能：コミュニケーションを円滑に進めるための語の働き。

(1) 話題：人間科学部の建物の汚さ

- 368 U：阪大病院に入院してた人が、なんか⁵⁾、
 →369：うちの学部の人、高校の同級生かなんかで、
 370：でお見舞いに行ったら、人科の方見て、
 →371：あの建物って、こー精神病棟の隔離棟かなんか? って言われて、
 372 X： {笑：あはははははは}

データ(1)の369および371の「なんか」は、はっきりしていないものを「確実ではないけれど…のようなもの」として指示している。このような不確実性・不特定性の標識としての働きが「なんか」の最も本質的な機能であると思われる。

3.1.2 助詞としての「なんか」

「なんか」は助詞として名詞の後に続き、先行する名詞句に以下のような意味を添加することができる。

(2) 話題：プロ野球

- 224 B：やっぱ好きなチームがあれば見てる方もものすごいだろー、
 →225：すごい勝った時なんかは。
 226 U：うん、一応大阪人やから一応阪神やねん。
 227：┌だから
 228 B：└あー、阪神ファン。

(3) 話題：卒業論文のテーマ

- 079 J：私なんかまだ卒論のテーマも決まってない {笑い} んですけど、
 080 U：あーそーなんだー
 081 J：そう、でも院試の一書類とか全部卒論のテーマとか
 082：書かないといけないんですよ。 {笑い}

⁵⁾ 368の「なんか」については3.2.1.1を参照のこと。

(4) 話題：サークルの活動

- 229 U：海外とか関係あんの？海外
- 230 T： ┌ いっ、
└ 海外行く人もおるしー、
- 231：日本国内でやる人もおる、あって、
- 232：あんまりそなん興味ないしー {笑：へへっ}
- 233：いうたらそれで、そんなの手伝いとかせなあかんわけよ、
- 234 U：うん
- 235 T：入ったら、もうそれでもうー、
- 236：そのボランティアなんかやってられへんやんけ、って感じでな、
- 237：もう。
- 238：あーあ。

データ(2)の225では一例であることを示すという意味が、データ(3)の079では対比して強調するという意味が、そしてデータ(4)の236では価値の低いものであることを示すという意味が、それぞれ助詞としての「なんか」によって先行する名詞句に添加されている。

3.2 「なんか」の語用論的機能

「なんか」には発話内容に対する発話者の態度をメタメッセージとして聞き手に伝える語用論的機能がある。この機能は、production format の変化を予告・強調するものと、話し手の持つ否定的な意見を暗示するものとに大別される。

3.2.1 production format の変化を予告・強調する「なんか」

3.2.1.1 伝聞表現に呼応する「なんか」

(5) 話題：Cと同じ学部にも所属するDの友人

- 291 D：とかななんか、僕の友達のね、
- 292 C： そー うん
- 293 D：人科の人とか話聞いてると、
- 294：なんか最近、学校とかもなんか、
- 295：ほとんど行ってないらしいんだけど、
- 296：出なくていい、なんか授業が少ないって聞いたんだけど、
- 297：なんか週、なんかもう、今もう週休4日だとかいうようなやつ。

298C :

{笑:はははは}

データ(5)の291、294、296、297の「なんか」は、293「(友達の話聞いてると)、295「らしいんだけど」、296「って聞いたんだけど」および297「とかいう」といった、後続する伝聞表現に呼応する、副詞的な役割を果たしている。

そもそも伝聞表現は、その発話の production format が変化したことを示す合図となる。データ(5)に先行するテキストでは、Cが所属する学部教官に対する二人の感想が述べられている。その時点での発話者の production format は animator = author = principal である。一方、データ(5)における話し手Dの production format は、伝聞表現の使用から、animator = author ≠ principal に変化していることがわかる。principal が animator ・ author と一致していないため、話し手Dがその発話内容に対してやや離れた立場を取っていること、すなわち、発話内容に対する話し手のあいまいさ、自信のなさ、責任転嫁などがメタメッセージとして相手に伝えられるのである。

ところで、日本語の性質上、伝聞表現は解釈されるべき発話の終わり近くになつてようやく出現することが多い。これでは聞き手が発話を瞬時に解釈することができない。そこで、事前に「なんか」を挿入することで、production format の変化を予告し、後に続く発話内容に対する話し手の態度を聞き手に予測させているのだといえる。

3.2.1.2 婉曲表現に呼応する「なんか」

(6) 話題：人間科学部の建物の建て増し

132 T : 人科でも建て替わるん？

133 U : 建て替えー、ていうか建て増し？

134 T : 建て増し

135 U : なんか⁶⁾、あつという間にできるらしいけど。

136 T : へー

137 U : なん、どういう風に増える、部屋が増えるんかよくわからん。うん

→138 T : あれ、なんか、医学部の病院の前で、

⁶⁾ 135の「なんか」については3.2.1.1を参照のこと。

→139 : めっちゃかわいそうやん、っていう感じの。なんかね⁷⁾。

140 U : |笑い|

データ(6)の138および139で T は人間科学部の現在の建物に対する感想を述べている。138の「なんか」は後続する(139)「っていう感じ」に呼応する副詞的な働きをしている。

139の「っていう感じ」をはじめ、「みたいな」「とか思って」「気がする」などの表現や半疑問形は、若者が好んで多用する婉曲表現であると言われている。これらの語が使用されるとき production format は、animator = author = principal である。しかし、婉曲表現の使用は、principal があたかも animator・author と一致しないかのような効果をもたらすのではないと思われる。その効果によって、自分の感情や意見を述べるときに、発話内容に対して微妙に距離を置いていることを示し、意見を主張することに伴う責任を軽減、あるいはあいまい化してしまっているのだといえよう。

これらの婉曲表現も、3.2.1.1で述べた伝聞表現と同様に、解釈されるべき発話の終わり近くに出現する。それでは自分の感情なり意見がダイレクトに相手に伝わってしまう危険性がある。そこで、事前に「なんか」を挿入することで、あらかじめ production format の微妙な変化を強調しておき、後に続く発話に対する話し手の態度を聞き手に予測させているのだといえる。

次のデータ(7)の174のように、後ろに婉曲表現を伴わなくとも「なんか」が単独でこの機能を果たしている発話も多く観察された。

(7) 話題：Zが住んでいる京都

172 N : いやいや、でもあれやって、

173 : 京都とかむっちゃきれいなとこやし、うらやましいわ。

→174 Z : そーかなー。なんか暑いだけやでー。

175 N : あ、暑い。雪降るねやろ、すごい。

176 Z : いや、降らない。

177 N : あーほんまに？

178 Z : うん、いや北の方は降るけど、南の方は全然で寒いだけー。

⁷⁾ 139の「なんか」については3.2.2.1を参照のこと。

3.2.1.3 過去表現と共起する「なんか」

(8) 話題：Dの骨折

- 496 D：え僕の場合は事故じゃなくて、
 →497：たまなんか、学校でたまたまこうなんて、足は、踏みはずして、
 498 C：はん
 499 D：階段から？
 500 C：あーあー
 501 D：で、骨折ったんだけど、
 502：あの一入院費代以上にこう、あったよ、保険料の方が。
 503 C：あーそうなん？
 504 D：うんうん
 →505：すげーもうかったと思ったもん。〔なんか
 506 C：申請して？
 →507 D：うーん、それ、なんかだから、多分、学校内で起こったら、
 508 C：うんうん
 →509 D：多分、なんかそういう保険がみたいななんか、あったみたいで、
 510 C：うんうん へー
 →511 D：結構なんか、月に数万入ってきて、
 512：治療費よりも、多かったから、結構得しちゃった。

データ(8)ではDが過去に学校で骨折した体験を語っている。その一連の発話に「なんか」が頻繁に挿入される(497、505、507、509、511)。このように、話し手自身がかかわった比較的長い過去の物語を語る際に「なんか」が頻出することがある。ここでの production format は animator = author = principal である。しかし、過去の出来事の figure としての話し手は、現在物語を語っている話し手とは時間的な隔たりがあり、同じではない。figure は厳密には production format には含まれないが、production format とともに話し手を構成する役割であるため、figure の変化も production format の変化と同様に、「なんか」で予告あるいは強調されているものと考えられる。このように、過去を表す表現と相まって、「なんか」によって figure の変化が強調され、今語っている内容は過去に体験した出来事であり、実際とは異なってしまっている可能性があるというメタメッセージが聞き手に伝えられるのである。

3.2.2 否定的な意見を暗示する「なんか」

3.2.2.1 相手と食い違う意見を暗示する「なんか」

(9) 話題：Zの出身地、愛知県

→068 L：愛知の人も多いねー、でも。

→069 Z：そう？

→070：あそっか、うちのサークルでまちょこちょこといるけど。

071 L：うん

072 Z：かなー。

→073 L：ちょこちょこいるってのがなんか。

074 Z：あーあーあー、なるほどなるほど、うん

068でLは、大学にZのような愛知県出身の学生が多いと感じていることを述べている。しかしZの納得しかねる様子が069「そう？」および070「うちのサークルでまちょこちょこいるけど(それほど多いとは思えない)」からわかるため、073で「(小さなサークルにも)ちょこちょこいるってのがなんか(=大学全体では結構多いのではないか)」と言い足している。ここでは、すでに述べた「愛知県出身の学生が多いと思う」という意見を繰り返す代わりに「なんか」が用いられている。これは、Zが069および070で、Lが述べた意見に対して疑問を投げかけたことで、Lの意見がZの意見と食い違う可能性が出てきたためではないかと思われる。このように、自分の意見が相手の意見と食い違いそうな時には、その意見を明確に主張することを避けるために「なんか」を使つての暗示が行われるのである。ただしそのためには、「なんか」によって暗示されている意見が話し手と聞き手両方に共有されていなければならない。データ(9)の場合、「なんか」によって暗示されているLの意見は先行するテキストですすでははっきりと述べられていて聞き手にも共有されているため、聞き手は正しい解釈を行うことができるのである。

3.2.2.2 否定的な内容の意見を暗示する「なんか」

(10) 話題：アルバイト

285 Z：自分なんか⁸⁾してんの？

⁸⁾ 285の「なんか」については3.1.1を参照のこと。

(12) 話題：Tの出身地

- 233 T：んー、ちしゅうかん高校の場所知っ、
 234 : 知らない [よねー
 235 J： [うんわかんない、うんわかんない
 236 T：そっかー
 237 J： うんうん
 238 : 名前は知ってるけど。うん。
 239 T： うんうんそっかー
 240 J：へー
 241 T：んー？ そっかー
 →242 : なんか、音楽学ってすごい、ねえ。{笑：あへん}
 243 : なんか¹¹⁾アットホームで楽しそうって感じる。

241まで二人はTの出身地について話しているが、Jの知らない具体的な地名などが出たために、両者ともこの話題についてこれ以上発展させることを断念している。そこで242で新しい話題が導入されている。その時にまず「なんか」とそれに続く短い間で、これから話題が変わるということが示されているのである。このように発話の最初の「なんか」はしばしば短い間を伴って、新しい話題の導入の前置きともなる。

さらに、発話の最初だけでなく、発話中にも「なんか」が発話権をそのまま維持するために使われる。

(13) 話題：Nの研究テーマ

- 556 N：で、研究テーマってね、ジャズの方やから、
 557 T： はー
 558 N：もう延長みたいなものになっちゃってるからな。
 559 T： えー、すごい、
 560 : ジャズなのか、な、何やるの？
 561 N： そう
 →562 : なんか、うーん、ジャズの、そ、何やろな、日本の、ジャズ？

¹¹⁾ 243の「なんか」については3.2.1.2を参照のこと。

563 T : うん

→564 N : うん、んで、なんかちょっと、昔の、昭和初期ぐらいのこと？

565 T : うん

ここではNの研究のテーマが話題となっている。Nは562以降で研究内容の具体的な説明を試みている。しかし、すぐに適切な言葉が浮かんでこない様子が、562および564にみられる「なんか」「うーん」「何やろな」「うん」などの言い淀みの語句、細切れな間の取り方、半疑問形などからわかる。「なんか」を含めてこれらはすべて、発話権を維持し、より適切な言葉を探す余裕を作り出しているといえる。

このように、「なんか」が発話権を確保あるいは維持したいときに頻繁に使われることも、「なんか」が本質的に不確実性・不特定性の標識であることと無関係ではない。「なんか」の本来の指示対象が不特定であいまいであるために、発話の意味内容を変えることなく、つなぎとしての役割が果たせるのである。

4. まとめ

以上の分析の結果、実際の会話の中で使われる「なんか」は、これまで『広辞苑』（1998）や田窪・金水（1997）で定義あるいは指摘された以上に多様な機能を有していることがわかった。本論文では、データより浮かび上がった機能を、意味論的機能、語用論的機能、談話調整機能に分けて、それぞれを詳しく述べた。「なんか」の最も本質的な機能である意味論的機能は、疑問詞・代名詞および助詞として発話の命題内容を構成する要素のひとつとなるものである。語用論的機能は、production format の変化を予告・強調したり、あるいは話し手と聞き手両者に共有されている否定的な意見を暗示したりして、発話内容や発話者の発話に対する態度をあいまいにするというメタメッセージを聞き手に伝達するものである。そして談話調整機能は、時間的余裕を作り出したり、新しい話題の導入を示したりして、円滑なコミュニケーションを促進するものである。語用論的機能と談話調整機能は、不確実性・不特定性の標識という「なんか」の本質的機能から派生したものではないかと思われる。

これらの諸機能は、それぞれが単独で働くこともあれば、複数が同時に働くこともある。例えば、3.2.1.3で取りあげた「なんか」は、過去の出来事の物語で

あることを示すという語用論的機能を担っていると同時に、発話権を維持する談話調整機能をも担っていると考えられる。過去の出来事についての記憶が薄れていて、詳細を描写しようと記憶をたどるのに時間がかかっていることが想像されるためである。このように、「なんか」は二つ以上の機能を同時に担うことができる多機能語であり、それぞれの機能は互いに密接に結びついて複雑に働いているのである。

ただし、本論文で述べた機能の細分化および機能間の関連づけが妥当であるかどうかについては検討の余地がある。「なんとなく」「なぜか」「なんだか」「なんていうか」など、「なんか」と同様に不確実性・不特定性を示す語とはどの程度交換可能なのか、また、「なんかな(ー)」「なんかね(ー)」「なんかさ(ー)」といった終助詞を伴った場合は同じような機能を担うのか、という点を明確にしなければならない。さらに、本論文ではデータとして大学生同士の会話を使用しているため、「なんか」の使用に関しての世代差という問題も残る。今後、様々な世代の会話を収集することも必要である。

以上のような問題点は残るが、本論文によって「なんか」のように話し手も聞き手もほとんど意識しない語でさえ、その語が含まれる発話、その前後のテキスト、さらにはコンテキストとかわかって、会話で様々な役割を担っていることが示された。人間の言語行動を解明するためには、様々な要因を考慮して、データとなる会話をさらに細かく、深く分析しなければならないということを示唆しているといえる。

参考文献

- Goffman, E. 1981. *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Sacks, H., Schegloff, E. A. and Jefferson, G. 1974. A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation. *Language*, 50, 696-735.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1994. *Approaches to Discourse*. Oxford: Blackwell.
- ザトラウスキー, P. 1993. 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』東京: くろしお出版
- 田窪行則, 金水敏. 1997. 「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会編『文法と音声』257-279. 東京: くろしお出版

- 谷崎和代. 1994. 「談話標識についての一考察—「だから」を中心に—」『大阪大学言語文化学 Vol. 3』79-93.
- 土屋菜穂子. 1999. 「対話コーパスを用いた言い淀みの語の統語論的考察」『言語処理学会第5回年次大会 発表論文集』251-254.
- 『広辞苑』1998. 第5版(CD-ROM版). 東京：岩波書店